

大手前短期大学「社会人基礎力」の指標値 (2)

佐々木 英 洋

要 旨

本学(大手前短期大学)のカリキュラム・ポリシーにおいて、学生が身につけるべき6つの社会人基礎力「C-PLATS[®]」を掲げており、これらの能力の開発と育成を目的にカリキュラムを編成すること、また各授業におけるシラバスにおいて「C-PLATS[®]」のどの能力が育成されるかを学生に明示し、その実現に努めることを記している。現状は、これらの能力を学生が自己診断する仕組みはあるが、履修する授業とその成績によって各能力がどのレベルまでついたか、客観的な数値として集計する制度は未整備である。

前稿(参考文献[1])では学生が各科目で得たグレードポイントとシラバスに記載した「CPLAT」の能力を用いて、「CPLAT」の各能力がどれだけ授業の中で獲得できたかの「指標値」“CPLATi”の算出方法ならびにそれら活用方法について提案した。その内容を基にして、本学2017年度入年生で2018年度卒業対象者の1年終了時ならびに卒業時の成績より「CPLATi」の各数値を算出し、各学生が定期的に行う「C-PLATS[®] 自己診断」の数値との相関分析を試みたので、ここに報告する。

キーワード：社会人基礎力、カリキュラムポリシー、グレードポイント、GPA、PDCA サイクル

1. ^{シーブラッツ}C-PLATS[®] の概要・運用の現状

本学(大手前短期大学)のカリキュラム・ポリシー〔教育課程編成・実施の方針〕において、学生の社会人基礎力育成のために、次の6つの能力「C-PLATS[®]」の開発と育成を目的にカリキュラムを編成すること、また各授業におけるシラバスにおいて「C-PLATS[®]」のどの能力が育成されるかを学生に明示し、その実現に努めるこ

とを記している：

C - Communication (コミュニケーション力)：

相手を理解し自分の考えをわかりやすく伝える力

P - Presentation (プレゼンテーション力)： 自分の考えをまとめて発表する力

L - Language Skill (言語能力)： 決められたテーマについて論理的に表現する力

A - Artistic Sense (芸術的センス)：

芸術作品、デザインへの理解力と創造活動を通じて行う表現力

T - Teamwork (チームワーク)： 集団での自分の役割がわかり協力し合える力

S - Self Control (自己管理能力)： 自分の感情を冷静におさめ、行動できる力

運用の現状として、授業担当教員(専任・非常勤)にはシラバス執筆の際、その授業を受講すると「CPLAT」のどの力がつくかを明示していただくよう依頼している(「S (Self Control)」はどの授業でも共通に培うとの認識の下、選択からは外している)。現状では、「選択する」か「しないか」のみを担当教員に求めており、各能力のレベル表示等はしていない。

例えば、「コンピュータ演習」の授業では、「CPLAT」のうち、「P」「L」「T」の各能力を授業の中で育成することを指定している(図1)。

科目名	コンピュータ演習 (単独受講可能科目)	開講曜日・時限	木曜4限
単位数	1.0	授業形態	実習・実技
担当教員名【代表】	佐々木 英洋 (Hideyou Sasaki)		
担当教員名			
ユニット名	共通教育科目 (必修科目)	ここでは「P・L・T」を選択 (これらの力がつくことを明示)	
先修条件			
C-PLAT	C	P	L
		○	○
			○
			○
			○
			○
授業のねらい	コンピュータを情報活用の道具として利用し、勉学や仕事に活用できるようになるために、インターネット、電子メール、ワープロ、表計算ソフト、プレゼンテーションソフトの基本操作を取得することを目標とします。また、OCNET (大手前学園の情報ネットワーク) を勉学に活用できるようにすることも大きな目標です。		
授業時間外学習	<ul style="list-style-type: none"> ・次回授業で学ぶ用語・ソフトの操作方法を調べること ・前回授業で学んだ内容・ソフトの操作方法を復習すること ・指定されたタイピングソフトでタッチタイピングの習得のための練習を行うこと ・課題として出題されたファイルを作成すること 		
授業計画			
回	主 題	内容・授業方法・予習および時間・復習および時間・得られる成果など	
1	<ul style="list-style-type: none"> ・OCNETの利用 ・インターネット ・ウィンドウスの基本操作 	OCNET、ネットワークドライブの利用法について学ぶ (L) Webブラウザを使ってインターネットに接続する方法を学ぶ (L) ウィンドウスの画面構成、基本操作について学ぶ (L) 予習・復習：計1時間	
2	<ul style="list-style-type: none"> ・タイピング練習 ・Wordの基本操作 ・文字列・文書入力 	タッチタイピング修得のため、タイピング練習を行う (L) Microsoft Word 2013の画面構成、基本操作について学ぶ (L) 文字列・文章の入力・変換について学ぶ (L)	

図1 シラバスの例 (コンピュータ演習)

学生には卒業年次までに5回（学期期初・期末）、どれだけ「C-PLATS[®]」の能力を獲得できたかを自己診断し集計する仕組みはある。「C-PLATS[®]自己診断シート」として各能力のあらかじめ定められた設問に回答しながら9段階評価を行い集計するというものである（詳細は略）。また、各学期終了後に行う「授業アンケート」でも、各授業においてどの能力が育成されたかを回答させ、その授業の担当教員が集計結果を確認し、次学期の授業にフィードバックすることができる体制にある。

いずれも学生の自己診断によるもので、履修する授業とその成績によって「CPLAT」各能力がどのレベルまでついたか、客観的な数値として集計する制度は未整備に留まっているのが現状である。

2. 指標値 ^{シーブラッティ}CPLAT_i[®] の概要

前節で見たように、「CPLAT」各能力を客観的に評価する施策が求められているが、その方法案としての指標値 CPLAT_i の概要を改めて以下に記す。詳細は参考文献[1]を参照のこと。

シラバスの「CPLAT」と「GP」から算出する客観的な数値としての能力の「指標値」を導入すべく“CPLAT_i”（CPLAT index）を以下で定義する：

その科目のグレードポイント（GP）を、シラバスに記載された「CPLAT」にそのままの値で振り分け、それを履修したその科目で得られた「CPLAT」の各能力値とみなす。

GPAを算出するのと同様に、履修した各科目の「CPLAT」の能力ごとに

$$[(\text{能力値} \times \text{単位数}) \text{の合計}] \div [\text{その能力を指定している科目の総単位数}]$$

を計算して求めた値（0.0～4.0）を「CPLAT_i」と定義する。

この値は、あくまで能力の向上の度合いの傾向を示す「指標」であるとした上で、

- 4.0：「その能力が十分あり、自ら積極的に活用できる傾向にある」
- 3.0：「その能力が十分あり、適切に活用できる傾向にある」
- 2.0：「その能力の重要性を十分理解している」
- 1.0：「その能力の重要性を最低限理解している」
- 0.0：「その能力の重要性の理解が不十分である」

という意味を持つものとする。

以下に CPLAT_i の計算例を挙げる。学生が得た各科目のグレードポイント（GP）

を、シラバスで指定された各「CPLAT」の能力に割り振る。例えば以下の表1のように「コンピュータ演習」であれば「P」「L」「T」にそれぞれ3.0の値を振り分ける。以下他の科目も同様にしてGPの値を「CPLAT」の各値として割り振る。

これらの値を基にして、上に述べた方法で各「CPLAT_i」を算出する。例えば「C」においては

$$\text{〔調理実習 A (の GP)〕 } 1.0 \times 2 \text{ (単位) } + \text{〔日本語表現法〕 } 2.0 \times 1 + \text{〔接客実務演習〕 } 3.0 \times 2 = 10.0$$

を、これらの科目の総単位数

$$\text{〔調理実習 A (の単位数)〕 } 2 + \text{〔日本語表現法〕 } 1 + \text{〔接客実務演習〕 } 2 = 5 \text{ (単位)}$$

で割り、 $10.0 \div 5 = 2.00$ 、すなわちCの能力値=2.00と算出する。

同様にして他の4能力についても $P = 3.00$ 、 $L = 3.17$ 、 $A = 2.40$ 、 $T = 2.20$ と算出される。これらが各能力の「CPLAT_i」である。

表1 CPLAT_iの算出結果

履修科目	単位数	C	P	L	A	T	成績 (GP)	CPLAT _i				
								C	P	L	A	T
コンピュータ演習	1		○	○		○	3.0		3.0	3.0		3.0
調理実習A	2	○			○	○	1.0	1.0			1.0	1.0
日本語表現法	1	○		○	○		2.0	2.0		2.0	2.0	
ビジュアルアートA	2			○	○		4.0			4.0	4.0	
接客実務演習	2	○	○	○		○	3.0	3.0	3.0	3.0		3.0
(GPA)							2.63	2.00	3.00	3.17	2.40	2.20

CPLAT_iを算出することにより、例えば次のような本学のカリキュラム・ポリシーに沿ったPDCAサイクルが期待できる。

〔Plan〕 各科目において、授業内容計画に加えてCPLATの選定を各授業担当教員が行う。

〔Do〕 授業を実施後、成績評価を確定すると、CPLAT_iの算出がなされ各学生のCPLATの傾向が示される。

〔Check〕 CPLAT_iの傾向分析や、「C-PLATS[®]自己診断シート」に記載された各学生の自己診断との比較を行うことが可能になる。

〔Act〕 FD（授業改善）活動やフィードバック、すなわち授業内容・授業手法の見直しの判断材料の一つとする。そしてその効果を次の授業内容計画に生か

す。また学生個別の各能力を把握することにより、個別指導等にも生かせる。

3. CPLAT_iの算出例 —「C17生卒業対象者」の分析結果—

本学2017年度入年生で2018年度卒業対象者（以下「C17生卒業対象者」と記す）の1年終了時ならびに卒業時の成績より「CPLAT_i」の各数値を算出し、各学生が定期的に行う「C-PLATS[®]自己診断」の各同時期の数値との相関係数を求めその分析を試みた（なお、「卒業年次」までの推移を見る目的もあり、2017年度入学生で長期履修生（3年修学生）のデータは今回割愛した）。

3.1 2017年・2018年度開講科目

2017年・2018年度開講科目数はそれぞれ延べ287科目・272科目であった。これらの科目に対して、各CPLATが該当する延べ科目数は以下の通りである：

表2 各CPLATが該当する延べ科目数（2017・2018年度）

年度	C	P	L	A	T
2017	174	183	225	140	139
2018	174	175	224	133	131

3.2 分析内容と結果

C17生卒業対象者168名の1年終了時・2年終了時のCPLAT_iを算出し、各学生が自己診断で記入している「C-PLATS[®]自己診断」（以下「自己診断」：各能力を9段階で自己診断；「9」が最高）の各学期末の数値との相関係数を求めた。

各年度の CPLATi の平均値、区間の幅 1 ごとの人数・割合を以下に示す：

表 3 CPLATi の平均値

年度	C	P	L	A	T
2017	2.46	2.52	2.53	2.41	2.53
2018	2.47	2.51	2.50	2.46	2.52

表 4 CPLATi の各区間の人数 (上段)・割合 (下段)

年度	区間	C	P	L	A	T
2017	[3, 4]	47	55	52	47	48
		28.0%	32.7%	31.0%	28.0%	28.6%
	[2, 3]	74	67	78	77	83
		44.0%	39.9%	46.4%	45.8%	49.4%
	[1, 2]	42	42	32	36	34
		25.0%	25.0%	19.0%	21.4%	20.2%
	[0, 1]	5	4	6	8	3
		3.0%	2.4%	3.6%	4.8%	1.8%
2018	[3, 4]	46	52	49	49	48
		27.4%	31.0%	29.2%	29.2%	28.6%
	[2, 3]	78	75	78	77	79
		46.4%	44.6%	46.4%	45.8%	47.0%
	[1, 2]	42	39	38	36	39
		25.0%	23.2%	22.6%	21.4%	23.2%
	[0, 1]	2	3	4	6	2
		1.2%	1.8%	2.4%	3.6%	1.2%

注：各区間において、[a, b) ([a, b]) は「 $a \leq x < b$ 」(「 $a \leq x \leq b$ 」)となる x の範囲を表す。

C-PLATS[®] 自己診断の各年度の平均値を次の各表に示す。なお、C-PLATS[®] は 1 ~ 9、CPLATi は 0 ~ 4 の数値をそれぞれ取るので、C-PLATS[®] の値を CPLATi の値に揃えるために、「 $((C-PLATS[®] \text{ の数値} - 1) \div 8 \times 4)$ 」の値もあわせて示している：

表 5 C-PLATS[®] 自己診断の平均値

	C	P	L	A	T
2017年度 (1 年終了時)	6.63	4.84	5.28	4.24	6.49
$((\text{上記数値} - 1) \div 8 \times 4)$	2.82	1.92	2.14	1.62	2.75
2018年度 (2 年修了時)	7.37	5.99	6.01	4.93	7.08
$((\text{上記数値} - 1) \div 8 \times 4)$	3.18	2.50	2.50	1.96	3.04

各年度における、168名全員の各 CPLATi ならびに自己診断との相関係数を表 6 に示す：

表 6 各 CPLATi ならびに自己診断との相関係数

	C	P	L	A	T
2017年度	-0.01	0.04	0.26	0.05	0.08
2018年度	0.10	0.14	0.18	0.03	0.12

表 3・4 より CPLATi の平均値は 2 つの年度でほとんど変わっていない。一方、表 5 より C-PLATS[®] 自己診断の平均値はいずれも 2 年終了時の方が値として伸びている。

ところが表 6 より 1 年次・2 年次の相関係数はいずれも小さいとはいえ、2 年次の方が 1 年次に比べて「C」「P」「T」において伸長している。すなわち、1 年次に比べて 2 年次の方が、客観的数値・自己診断値の間に、ゆるやかではあるが相関を持つ傾向にあることが見られ、在学中に C-PLATS[®] のコンセプトに基づいた教育の効果がある程度出ていることを確認できる。

4. まとめ

今回は入学から卒業までの CPLATi と C-PLATS[®] 自己診断の相関を見た。カリキュラム・ポリシーに基づいた教育の効果は得られていることが、この結果からも把握できるのではないだろうか。

CPLATi の導入は本学では実際にはまだなされていないが、学修効果を測定し「フィードバック」のための指標（目安）としては十分有効なものではないか、と改めて考えられる。

今後も、指標値と自己診断の相関を把握するなど、こういった数値を追跡調査することが「学習効果の測定」につながると期待される。また、他の分析手法も開発する必要があると考えられるが、今後の検討課題としたい。

参考文献

- [1] 佐々木英洋 (2019) : 「大手前短期大学「社会人基礎力」の指標値」『大手前短期大学研究集録』第38号, p. 49-59.